

びわこ学院大学 令和六年度 学校推薦型選抜（公募推薦）「小論文問題」

次の文章を読み、あなたの考えたことを六〇〇字程度で述べなさい。

ふだんのニュースを見ていても、みんな「わからない」ことには興味が持てません。なぜ「わかりやすい解説」にニーズがあるのか。それは、解説によつて「わからない」から「興味を持つ」まで橋渡しができるからではないでしょうか。「興味を持つ」というのは、勉強の「入り口」にあたります。「わかりやすい解説」で興味が覚えたら、その先については自分自身で手間ひまをかけて勉強してほしいのです。

わかりやすい解説をしている側は、その裏でわかりにくいけれど絶対に勉強しておかなければいけない本をたくさん読んでいます。あるいは一次資料を探し出したり、フィールドワークを重ねて現場を体験したりしています。だったら、学ぶ側も、どこかで学ぶ労を負わないと、自分の力をつけることにはなりません。

英会話のたえで言うと、私の解説は基礎英語です。そこで英語に興味を持ったら、今度は自分の努力でビジネス英会話やTOEFLを受けるように、自分自身で勉強をしてほしい、と願っています。

ただ、本を読み慣れていない人は、いきなり専門書を読んでもなかなか頭に入らないかもしれません。

そういう人におすすめなのが、私が「こどもニュース」のキャスター時代に会得した、アウトプットを意識したインプットという読書法です。何をするかという、自分が読んだ本の内容を、それに詳しくない人に説明してみる。人に説明しようとする、案外わかっているつもりの内容がさっぱり頭に入っていなかったことがわかったりします。

「こどもニュース」時代の経験で言うと、たとえば「日本銀行の金融緩和ってどうやるのか」を小学生に理解してもらおう、という課題を念頭に専門書を読んでみる。読んでいる最中に、この仕組みをやさしく例えるにはどうしたらいいか、小学生にもわかる言葉に置き換えるにはどんな比喻ひゆをもつてくればいいのか、と自問自答する。

そこで、今度は、スタッフを実験台にして説明を試みます。すると、「ここはよくわからない」「ここがまだるっこしい」と文句が出てきます。そこを修正していくうちに自分が本で得た知識が血肉けつにくとなっていく。こんな具合に、常にアウトプットを意識したインプットをするわけです。

すると、おもしろいように本の中身が自分の頭に入ってきます。そうやって、インプットしたら、今度は誰かに説明してみる。つまりアウトプットを試みる。最初はだいたいうまく説明できません。でも、何度も繰り返すうちに、だんだん説明が上手になります。

自分がインプットしたものを、誰かに話す、つまりアウトプットする。これは勉強だけではなくて仕事でも使えるような技ですね。

誰かに自分の仕事を説明することで、自分の仕事のおもしろいところ、課題があるところなどが明らかになっていきます。

学校の先生は、授業をやるのがアウトプットであり、同時にインプットでもあるわけです。

忙しくてできる人に限って猛烈に読書をしていることは、すでに書きましたが、これからの「人生100年時代」を生きる以上、もっとインプットの努力をしてみましょう。

（池上彰『なんのために学ぶのか』SB新書）